

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	(地域レベルでの取組基盤の整備)協働と持続性確保のための枠組み・体制の整備
手法名	正しい認識と合意形成にもとづく地域ぐるみの鳥獣害対策体制の構築
主体	宇都宮大学里山科学センター他
背景 (地域の課題)	農山村における鳥獣被害は、農家の生産意欲をそぎ、耕作放棄と離村に拍車をかける大きな問題となっている。個別の防除技術はあるものの、地域ぐるみで取り組まなければ防ぐことはできない。
手法/方策の詳細	<p>鳥獣害対策は、コミュニティの再生により集落ぐるみで協力し、正しい認識のもので必要な防除技術により棲み分けを行うことが重要である。</p> <p>捕獲による頭数管理は、イノシシの場合もサルの場合も、極めて困難である。過去の実例によれば、捕獲圧よりも繁殖力の方が優っており、捕獲による抑制は難しい。棲み分けを徹底するしかない。</p> <p>イノシシについては、電柵等で棲み分けをし田植えでイノシシの好む生息環境(隠れる場所と食べ物がある場所、すなわち藪化した広葉樹林内、竹林、草が伸びた耕作放棄地)をなくすことが確実な方法である。</p> <p>サルについては、思い込みで諦める傾向があるが、防除技術はほぼ確立されており、正しく電気柵等を設置すれば被害はほぼ防ぐことができる。</p> <p>鳥獣の生態に関する正しい知識、生息状況の把握、電気柵等の防除設備を正しく設置・管理しきっちりと棲み分けすることが確実な方法である。</p> <p>しかしながら、過疎化や耕作放棄地の増加などの問題を抱える農村では、電気柵周辺の草刈りが追いつかないなど、個々の農家がそれぞれに対策をとることは困難な場合も多い。そのような場合は、地域ぐるみ協力して対策にあたるのが重要である。</p> <p>過去の実例から、鳥獣害をきっかけに集落が団結して対策にあたり沈静化に成功したところと、諦めた結果被害が収まらず、離村や集落崩壊に向かうところと二つのパターンがある。</p> <p>地域が互いに協力して対策を講じるには、住民が一緒になって集落点検を行い、ワークショップを通じて合意形成と計画づくりに取り組むなど、鳥獣害対策を機にコミュニティの再生を図り、協力しながら防除設備管理や生息環境の除去、声の掛け合いといった対策をとることが必要になる。</p> <p>また、野生鳥獣と防除技術について正しい認識と知識・技術をもち、活地域のコーディネートを行う人材が必要である。宇都宮大学ではその人材育成にとりくんでいる。</p>
手法・技術的視点	鳥獣被害は、捕獲だけでは沈静化は困難。生息環境をなくすための作業を、地域が団結して、ワークショップ等での合意形成と計画づくりを経て対策を講じる必要がある。
参考資料	里なび研修会in栃木 宇都宮大学特任助教 江成広斗、特任助教 小寺祐二、特任准教授 高橋俊守